

(27)コナラーノグルミ群落

(相観)落葉広葉樹の高木林

この群落は対馬の上島と下島の西側を中心に発達する二次林である。他県のコナラ群落と比較したとき、ノグルミとガンカイツツジの高い常在度と、ネザサとヤマツツジを欠く点で特色を有する。とくに浅い土地では、ゲンカイツツジとアベマキの優占度が高くなる。高木層の高さは10-12m、エゴノキ、マルバアオダモ、コバノガマズミ、リョウブ、ヤマウルシを混生する。林床にはススキ、マルバハギ、オオアブラススキなど陽性植物が生育する。

(28)ヒトツバタゴ群落

(相観)落葉広葉樹の高木林または亜高木林

対馬上島の北端部のみに見られる二次林である。その組成は上記のコナラーノグルミ群落にヒトツバタゴが加わった形である。土壌は一般にうすくやや乾いた立地に見られることが多い。(点表示)

(29)クヌギ群落

クヌギは諸種の二次林に単木的には生育がみられるが、その優占する高木群落は丘陵地の尾根筋や傾斜地の浅土地に限られる。特に県下では西彼杵半島、長崎市周辺、野母崎半島の丘陵上部によく発達している。高木層にはクヌギが優占する落葉広葉樹林であるが、林内にはネズミモチ、ヤブコウジ、トベラ、シャリンバイ、ヤブランなど多くの常緑植物を生ずる。周辺には通常シイ・カシ萌芽林が発達していて、冬季には落葉性のクヌギ群落の存在はよく目立つ。

(30)シイ・カシ萌芽林

(相観)常緑広葉樹の高木林または亜高木林

シイ・カシ萌芽林は長崎県下ではもっとも広域に発達する二次林である。その発達領域は五島や九州本島では海拔450m以下、対馬では350m以下のシイ林域である。その原植生は、タブームサシアブミ群集、スダシイ・ミミズバイ群集、スダシイ・ホソバカナワラビ群集、スダシイ・ヤブコウジ群集、イスノキ・ウラジロガシ群集のいずれかである。



図 1 5 アラカシ萌芽林断面模式。

- | | |
|-----------|-----------------------|
| 1. アラカシ | 7. クチナシ |
| 2. アカメガシワ | 8. ウラジロ |
| 3. シリブカガシ | 9. オオカグマ |
| 4. ナナメノキ | 10. ジャノヒゲ |
| 5. ハクサンボク | 11. マメツタ <i>Lemma</i> |
| 6. ヒサカキ | |

群落高は伐採後の経過年数によって異なっており、2-10m、林冠は自然林とくらべて凹凸が少ない。萌芽幹は株あたり6-2本である。土壌の浅いところではアラカシが多くなり、しばしばアラカシの優占度がスダシイを上回る。ハゼノキ、ネムノキ、カラスザンショウ、アカメガシワなどの落葉広葉樹を混成するのが自然林と区別できる特徴の一つである。林冠に密に葉が茂るため、林床には植物が少なく、原植生の標徴種を欠くことも組成上の特色である。このため組成は全般的に単純である。萌芽林が発達し、萌芽幹が40cmを越す程度まで大きくなると、次第に自然林の標徴種ももどってくる。

(31)アカガシ萌芽林

(相観)常緑広葉樹の高木林または亜高木林

アカガシ萌芽林はアカガシ-ミヤマシキミ群集の代償群落で、九州本島では海拔450m、対馬では350m以上のアカガシ林域に発達する。群落高は伐採後の経過年数によって2-10mの幅がある。林冠は自然林と違って滑らかで凹凸は少なく、密閉する。このため林内の光量は低下して林床植生は疎開する。伐採後の経過年数が多くなり群落高も自然林にちかざくと、アカガシ-ミヤマシキミ群集の標徴種も戻ってくる。

(32)マテバシイ-ハクサンボク群落

(相観)常緑広葉樹の亜高木林または低木林

この群落は萌芽林の一種である。かつて里山のシイカシ萌芽林が薪炭林として利用されていたころ、伐採後にマテバシイのどんぐりを埋め込み、発芽させ、その後繰り返し伐採を続けていくと、シイ萌芽林はマテバシイ萌芽林に転換して行った。こうして出来上がったのが、マテバシイ-ハクサンボク群落である。群落高は伐採跡の経過年数によって2-10mの幅がある。林冠には密にマテバシイの葉が茂り、そのため林内には光が入射せず、暗くて林床には植物が少ない。ハクサンボクがこの群落に特徴的に出現する訳ではない。種組成は極めて単純である。長崎県では長崎市周辺や野母半島、西彼杵半島に若干は発達しているが、北松地方、平戸、壱岐では二次

林の中心をなし広く見られる。

(33) 伐跡群落

(相観)夏緑性の草本あるいは低木群落

ここに言う伐跡群落には、伐採直後の草本群落でダンドボロギク、ベニバナボロギク、ヒメムカシヨモギ、ヒメジョオン、オオアレチノギク、ヤクシソウなど風散布のキク科植物をもつ群落、その後に続く好陽性のタラノキ、ヌルデ、アカメガシワ、カラスザンショウ、イヌザンショウ、ゴンズイ、アオモジ(長崎県下では五島、壱岐、対馬を除いては伐跡群落に特徴的に出現する)などからなる低木群落を含む。こうした群落の中には、伐採直前の森林群落の切り株からの萌芽があり、伐跡群落やがてその優占する二次林に復帰して行く。

(34) メダケ・ヤダケ群落

(35) ダンチク群落

(相観)常緑あるいは半常緑性のイネ科植物群落

メダケ群落は海に面する斜面に代償群落として発達することがある。通常ヤダケは生育せずメダケ優占の群落である。ダンチク群落も海岸斜面や沿海地方の丘陵斜面に叢生する。いずれもメダケあるいはダンチクの優占度が高いために他種の混成はすくなくて純群落の様相を呈する。群落内にはヒサカキ、ナワシロイチゴ、カラムシ、ヨモギなどが少量生育するに過ぎない。

(36) ススキーチガヤ群落、ススキーメカルカヤ群落

(相観)夏緑性のイネ科高茎草原

ススキ優占の群落の立地には、かつての採草地と放棄畑地とがある。いずれの場合もチガヤを混成している。前者がススキーメカルカヤ群集で、メカルカヤ、オカルカヤ、モロコシガヤ、トダシバ、チガヤなどイネ科草本をおおく生じ、ほかにオミナエシ、シラヤマギク、アキノキリンソウ、ミツバツチグリなどの草本が生育する。県下では東彼杵の大野原、佐世保の烏帽子岳、北松の吹上高原、五島の鬼岳、対馬の千伎時山にみる。後者は各地にあり、放棄された

畑の土壤条件を反映して組成は一定しない。

(37) シバ群落(シバーツボクサ群集、シバーゲンノショウコ群集、ギョウギシバ群落)

(相観)夏緑性のイネ科短茎草原

長崎県下のシバ草原には低海拔の沿海地方のシバーツボクサ群集と、雲仙田代原のシバーゲンノショウコ群集(トダシバ亜群集)とがある。いずれもシバ優占群落で、スズメノヤリ、スズメノヒエ、チチコグサ、シバズゲ、ウマノアシガタなど群団標徴種を生ずる点で共通するが、前者にはツボクサ、ハマゼリ、ハマアオスゲ、ソナレムグラ、ノチドメ、後者にはキンミズヒキ、コナスビ、ゲンノショウコ、トダシバ、ウメバチソウが生ずる点で区別できる。シバーツボクサ群集は五島各地、平戸、壱岐に発達する。

(38) アカマツ-ヤマツツジ群落

(相観)常緑針葉樹の亜高木または高木林

長崎県下では二次林は常緑樹の萌芽林がもっとも広く発達し、アカマツ優占の二次林は優勢ではない。組成上は林床にヤマツツジを生ずる点では共通性があるが、低海拔のアカマツ二次林の林床には、乾性の立地ではコシダ、やや湿性の立地ではウラジロが優占する。アカガシ林域のアカマツ二次林ではこれらのシダ類を欠く。組成上では、コナラ、ネジキ、ハゼノキ、ネムノキ、アオモジなど夏緑性の木本のほかに、シイ、アラカシ、ヒサカキ、クロキなど多くの常緑植物も生育している。県下では諫早～大村地方、島原半島に見られる。

(40) クロマツ群落

(相観)常緑針葉樹の高木林

クロマツは沿海地方に分布する針葉樹で、その立地はすでに人為を受けていて、自然群落と代償群落の区別が着きがたくなっている。二次林としてのクロマツ群落は県下では優勢ではない。また組成的内容も必ずしも一定しない。福江島の鏡瀬、小値賀島、宇久島、壱岐の八幡浜、対馬のつつ崎が主な群落地である。組成は海岸に近

いという立地を反映して、トベラ、マサキ、シャリンバイ、ハマビワなど海岸性の常緑低木を含む。

(41) クズ群落、(林縁性つる－低木群落)

(相観)夏緑性のつる植物群落

クズは伐跡群落や林縁、疎開した木本群落に生育するが、ここでいうクズ群落はおもに放棄畑に発達したクズ優占群落を指す。おおくの場合、アカメガシワ、ネムノキ、ヌルデ、カラスザンショウなど、好陽性の夏緑低木が散在する。クズに被われた各種の二次林は、それぞれの二次林に含めてある。

[河辺・湿原・塩沼地・砂丘植生(各クラス域共通)]

(42) オオミズゴケ群落

(相観)低層湿原

長崎県下では雲仙の原生沼にだけ発達する。その面積も小さく、わずか2haに過ぎない。ここにはハリミズゴケ、ヒメミズゴケも生育する。おもな種類は、ヨシ、ヒメゴウソ、アブラガヤ、カキツバタ、ノリウツギである。

(43) ヨシクラス

(相観)イネ科の草本群落

諫早湾の本明川河口に、ヨシの純群落が見られるほか、ヨシ、マコモ、ガマなど挺水植物の群落である。過湿の休耕水田に発達することもある。対馬では湾奥の湿地や休耕田に見る。

(44) ツルヨシ群集

河川の中流域に発達する。ほとんどツルヨシの純群落である。長崎県の川は総じて急流で海にせまり、ツルヨシ群落の発達する領域はせまい。

(45) 塩沼地群落

(相観)夏緑性の草本またはイネ科型草本の群落

塩沼地群落としてここに扱うものは、シオクグ群落、シバナ群落、ナガミノオニシバ群落、ハマサジ群落、ハママツナ群落、フクド群落、ホソバハマアカザ群落である。河口域あるいは波静かな内湾の岸に幅狭く発達する。開発が進んでいない離島で見られる事が多いが、広い面積にわたる例はない。(点表示)

(46) 砂丘群落

(相観)常緑または夏緑性のイネ科草本型群落および夏緑性広葉低木

砂丘群落として扱うものには、砂丘や砂浜のほか、砂れき質海岸に生育する草本群落および低木群落のすべてを含む。すなわちオカヒジキ群落、スナビキソウ群落、コウボウムギ群落、ケカモノハシ

群落、ハマゴウ群落、テリハノイバラ群落などである。砂丘や砂浜の群落は、福江島の西部、宇久島北部、平戸の千里浜、野母崎半島の脇岬、島原半島の野田浜、壱岐の筒城浜、同じく辰の島、対馬の黒島などにまとまって見られ、れき質海岸の群落は小規模には各地にある。

(47) ハチジョウススキ群落、海岸崖地群落

(相観)多年生広葉草本およびイネ科型草本の群落

岩石海岸または急傾斜の海岸斜面に発達する草本群落で、ハチジョウススキ群落、ダルマガクホソバワダン群集、ハクウンキスゲ群落(対馬のみ)、ヒゲスゲ群落などが含まれる。本土側ではまれであるが、離島には普通に見られる。



図16 雲仙硫気孔周辺の植生模式

A 硫気孔, B ツクシテンツキ群集, C ススキ群落, D シロドウダン群落, E アカマツミヤマキリシマ群集シロドウダン亜群集

1. ツクシテンツキ, 2. ススキ, 3. ミヤマキリシマ, 4. シロドウダン, 5. ネジキ, 6. アカマツ, 7. シキミ, 8. タカノツメ

(49) 硫気孔原植生

(相観)イネ科型草本群落

硫気孔周辺に発達する草本群落で、ツクシテンツキ群落およびイトススキ群落が含まれる。雲仙の古湯と新湯の地獄地帯に見られる。

(50) ハイビャクシン群落

(相観)ほふくした常緑針葉低木の群落

海岸崖地あるいは砂丘の頂上部に発達したハイビャクシンの優占群落である。上五島的美郎島、壱岐の辰の島、若宮島、名島島、対馬の北部および東部の小島または海岸に見られる。(点表示)

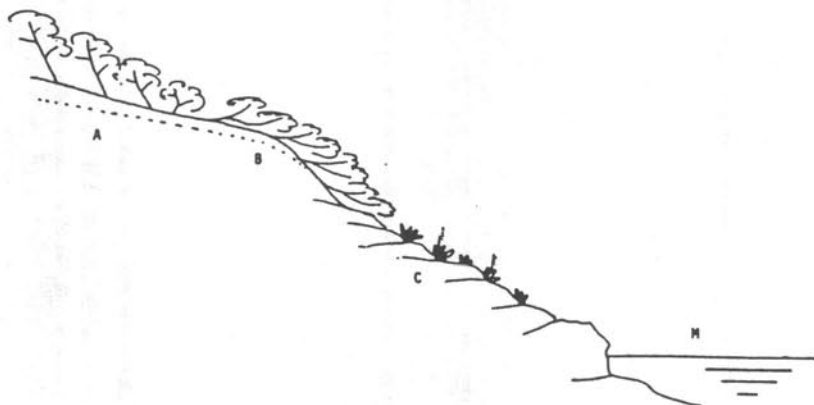


図 17 海岸崖地の群落分布模式 Schema of community distribution on coastal cliff.

A. ハマビワ-オニヤブソテツ群落 *Cyrtomio-Litsetum japonicae*

B. ハイビャクシン-ダルマガキ群落 *Astero-Juniperetum procumbentis*

C. ホソバワダン-ダルマガキ群落またはその先駆相 *Astero-Crepidiastrum lanceolatae* or its pioneering phase

M. 海面 Sea

[植林地・耕作地植生(各クラス域共通)]

(52) スギ・ヒノキ植林

(相観)常緑針葉樹の高木林

スギ・ヒノキ植林は照葉樹林域の各地に見られる。通常、スギは谷筋や緩やかな傾斜地などやや湿性な立地、ヒノキは斜面から尾根にかけての乾性な立地に植林される。

(53) クスノキ植林

(相観)常緑広葉樹の高木林

クスノキは常緑樹林には少量ながら生育するが、その優占する自然群落はない。気候風土が適しているためか、県南部には植林地がある。島原半島のなかに数箇所あり、とくに小浜町のは古い。樹高は25m、幹径は1mに達し、林内には多くの常緑植物が生育する。

(55) モウソウチク林、(56)マダケ・ハチク林

(相観)常緑竹林

長崎県下には、各地に小規模の竹林がある。多くはモウソウチクである。マダケ・ハチク林は過度の伐採の繰り返し跡地に成立を見ることがある。

(57) 常緑果樹園

(相観)常緑広葉の低木林

県下では柑橘類とビワである。両者ともに長崎市周辺、諫早市周辺、大村市周辺、島原半島、西彼杵半島、野母崎半島に広い。離島では生育適地はひろいが、栽培はあまり盛んではない。柑橘類の栽培北限は対馬の最南部である。

(76) 落葉果樹園、ハゼノキ植栽 (31頁の追記参照)

(相観)落葉広葉の低木林

ブドウ園とクリ園がこれに当たる。前者は西彼杵半島にある。クリは各地で植栽されているが、果樹園としてまとまって植生図上にでるのは対馬の一個所のみである。

(58) 桑園

(相観)落葉広葉樹の低木林

各地に小規模に散在している。五島三井楽町一帯には比較的まとまって造成されている。

(59) 茶 畑

(相観)常緑広葉の低木群落

茶の栽培は内陸で行なわれる。小規模の茶園は内陸各地にある。大規模なのは佐世保から世知原にかけての内陸地帯である。離島では島面積が小さくて、内陸的な立地がなく、茶も栽培されない。

(60) 畑地雑草群落

(相観)一年生植物群落

各種の野菜類の畑の群落で、大きくは春雑草群落と夏雑草群落とに分けられる。それぞれ冬季一年生植物(ナズナ、ハハコグサ、ヤエムグラ、スズメノエンドウ、オオイヌノフグリなど)、夏季一年生植物(ザクロソウ、イヌビユ、エノキグサ、スベリヒユ、エノコログサ、キツネノマゴなど)が構成する。

(61) ヒメムカシヨモギ・オオアレチノギク群落

(相観)一年生または多年生植物群落

放棄畑の初期群落である。ヒメムカシヨモギ、オオアレチノギク、ヒメジョオン、セイタカアワダチソウなど帰化したキク科植物が中心の草本群落である。

(62) 牧草地 (人工草地)

(相観)夏緑性のイネ科短茎草原

都市部から比較的近距離の範囲に、各地でゴルフ場の造成がみられる。シバ優占群落が中心で、造成期から長い時間を経ている雲仙のゴルフ場では、前述のシバ群落と同等の組成を持つ。

(64) 水田雑草群落

(相観)一年生植物群落

春季雑草群落と夏季雑草群落が季節をちがえて発達する。それぞれ冬季一年生植物(スズメノテッポウ、カズノコグサ、ムツオレグサ、ハハコグサ、ノミノフスマ、ハナイバナなど)、夏季一年生植物(コナギ、キサシグサ、ウリカワ、タマガヤツリ、タカサブロウ

など)が構成する。後者は除草剤の多用により量的には少なくなった。

(65) 休耕田雑草群落

(相観)多年生草本群落

耕作を停止した水田には、多様な群落が成立する。休耕初期には、湿田ではチゴザサ、ミゾソバ、キシウスズメノヒエなどの群落の記録があり、乾田ではススキ、チガヤ、ヨモギ、セイタカアワダチソウなどの記録がある。

[その他(各クラス域共通)]

(66) 市街地

(67) 緑の多い住宅地

(68) 公園・墓地

(68) 工場地帯

(70) 造成地

(71) ボタ山

(72) 碎石場

(73) 干拓地

(74) 開放水域

(75) 自然裸地

【76. 落葉果樹園、ハゼノキ植栽 追記】

島原市周辺では、果実から蠟を採取するために藩政時代にハゼノキの植栽が奨励され、その植栽地が島原市千本木に残っている。起源の上でも相観上も落葉果樹園に似るので、同じ凡例を用いて植生図上に表した。

